

慈眼寺たより

第 11 号

平成 23 年 12 月

春日井市下市場町

「慈眼寺」

電話 81 - 6801

編集 伊藤秀文

我がふる里

金ヶ口町

今井 正

新装成った神領駅の跨線橋に立ち、徐に東の方に視線を向けると、春日井市の最大のビューポイント、緑豊かな山の連なりが望める。これが東海自然歩道が走る東部丘陵地帯である。道樹山の東方約三キロにある外之原峠を越えると、私のふる里の集落が現存する。産声を挙げた頃のふる里は、岐阜県可児郡池田村大字小木字天ヶ峰と舌を噛むような地名であったが、現在は「多治見市諏訪町」というく世したような住所となった。四方を幾重にも山に囲まれ、陸の孤島と揶揄されるふる里に辿れる道は、内津峠、外之原峠、古虎溪駅からの三方路があるが、古虎溪駅からのルートがふる里の生活道として深く根付いている。

ふる里と同じ町域にあり、ふる里の玄関として欠かせない古虎溪駅。古虎溪の地名の由来について、父からこんな話を聞いたことがある。「その昔、中国の夢窓国師が、

東濃の地の一角を巡った折、国師の目を止めたのが景勝に勝る三つの場所。実在する中国の景勝地に類似することから、古虎溪、四笑庵、虎溪山と命名し称えた」と。

お盆には例年、マイカーで帰省し墓参していたが、今年のお盆は電車で帰省することにした。久しぶりに古虎溪駅のホームに降り立ち、眼下に流れる土岐川に目を注ぐ。小学生の頃、夏休みに毎日のようにこの川で泳ぎ遊んだ遠い日の光景が、水面に鮮明に甦る。古虎溪駅は、風雲急を告げる戦前、軍事面の輸送力増強のため、軍政の要請により断崖絶壁の場所に、大変な難工事を経て造られた駅である。当時は池田信号場と云って、列車の行き違いのみを行い乗客の乗り降りは出来なかった。晴れて駅に昇格したのは、昭和二十六年三月一日、この日を持って陸の孤島から開放されたふる里は、祝賀ムードで沸き立った。

そんな古虎溪駅を後にし、兼平が切り開いた旧道を辿りふる里に

向かうことにした。午前とはいえず、灼熱の陽光が容赦なく全身に降り注ぐ。汗だくになり喘ぎながら葛折の急峻な山道をゆつくりと上がる。三十分くらい歩を進め漸く峠に達し汗を拭いた。真下に垣間見る百尋の滝から心地よい涼風が吹き上げてくる。更に川添いの緩やかな山道を半キロほど進むと、住処三十戸ほどのふる里の民家が目に入る。この集落が諏訪町である。

遡ること八百余年、寿永三年（一一八四年）木曾義仲が栗津の合戦に敗れ討死した。木曾義仲に従った家臣、今井四郎兼平とその一族は、故郷信州諏訪に逃れようとしたが、追手に行手を阻まれ、仕方なくこの地に隠れ住んだと云われている。諏訪という地名も故郷信州諏訪を偲んで付けられたとの説もある。日本のあちこちに平家の落人部落があるが、諏訪町は数少ない源氏の落人部落である。ふる里の大半は今井姓で、古くから今日まで一族郎党の絆が脈々と続いている。

ふる里の西方に、標高三七八米の端正な秋葉山が悠然と立ち居る。この山頂を東海自然歩道が南北に走る。上手にあるお天王様には、樹齢三百年の大銀杏が祠を覆い被さるように、どっしりと構えている。地元では、名木の誉れ高

（裏へ続く）

《青柳歌壇・俳壇》

病む夫と眺むる遙かな連峰は

雪を冠りて 稜線光りぬ

雨戸うつ荒々しき雨おさまりて

眠りそこねし一夜の明くる

女

お早うと通学団に声かける

今朝も危険な交差路に立つ

特攻の遺影遺品に遺書を見て

知覧の悲劇に涙止まらず

今井正

慈眼寺の睡蓮紫極まれり

約束をたたいて雨フクシマ忌

伊藤清雄

しぐるるや道問えば茶を勧めらる

三島忌の父の遺品に軍歌集

冬寂ぶや自決の部屋の刀疵

矢野孝子

紫の睡蓮開くメダカばち

塩漬けの白菜うまし冬の朝

誕生日手に土つけてわけぎ抜く

伊藤貴美子

秋祭り太鼓の響き辻の方

秀

い大銀杏だが、子供の頃梯子をかけて高所まで上がり枝間を這い潜り、父親に大目玉を食らった覚えがある。

この大銀杏から小さな川沿いを西へ二百米の西ヶ洞なる丘に、立派な碑が立つ。ふる里の開祖、今井四郎兼平の事跡が刻まれ、碑の隣の塚で兼平は静かに眠っている。この兼平塚の際の細い道を百米ほど上がると、数本の杉の巨木が威風堂々と根を張っている。秋葉山を背に樹木、竹林に覆われ古色蒼然の佇まいの薬師堂、前掛し行儀良く並ぶお地蔵さん、それに厄除けのお堂や庵が古刹の趣を醸し出している。参詣者が減り一抹の淋しさが漂う。風雪に晒されながら損傷していない宝篋印塔が特に目を引く。源平時代の位の高い武士の塔と云われているが、何故か同じ宝篋印塔が虎渓山の永保寺にも現存する。

目と鼻の先に諏訪神社がこんもりとした森に鎮座します。この神社で大戦中、何人かの出征兵士を見送った。毎年、秋祭りには百年以上の伝統を守る「棒の手」が盛大に奉納される。この棒の手は岐阜県の重要無形文化財になっており、現在でもあちこちから出演の依頼があるという。私も青年団の頃、緊張の面持ちで棒の手を演

じたが、本番に備えての連夜の練習は実にハードで、熟達の先輩にしごかれ筋肉痛でトイレでしゃがめず、大変に難儀をしたことを覚えていいる。

昭和五十年代にはいり、ふる里に驚天動地の事態が発生した。愛岐処分場を受け入れるよう行政から話があり、賛成派と反対派が激しく相克した。当時、区長をしていた長兄は大変苦労したようだが、結局ふる里の山の半分は、処分場と化した。爾来、名古屋市は二十年以上、多治見市は十年以上に亘ってこの処分場に「ごみ」を廃棄し続けている。この先の廃棄もエンドレスと云う。営々と保たれてきた人の営みと、悠久の自然が公共の大義名分に崩されていく現実、夢窓国師と今井四郎兼平の嘆きが聞こえるようである。有為変転に抗しきれず、愛岐処分場の時計の針だけが逆回転している。ふる里がいかように変化しようと、ふる里のさらなる発展を祈るばかりである。

父と母 兄と先祖が眠る墓
霊安かれと 両の手合わす

花と花重なる如くしだれ梅
見とれて境内ゆるりゆつくり

・凌雲・

災害と町内会

区長 伊藤秀文

季節の変化の実感がなくまま、今年もあと一月足らずになつてしまいました。この三月の東日本大震災は千年に一度の規模とかで、震災に加え、最先端技術を集めたはずの原発が津波で壊され、放射能汚染で大被害となつております。自然の力の前に人間の無力さを見せつけられました。被災地の皆様を勇気づけられるような言葉も思いつきませんが、あの震災から今日の日本を築き上げたように、復興出来ることを願っています。

この下市場地区は、山崩れや津波の心配も無く、とても安全な所だと思つていますが、それでも何時大地震に見舞われるかもしれません。そんな時、力を合わせて助け合うことができる最小の組織が町内会であります。それを十分發揮するには日頃からの隣同士の親睦が大切だと思います。

春日井市では町内会の加入率が六八%で、連続的に減少傾向だそのです。こうした傾向は、地方自治の機能低下につながるため、市ではその対策に努力しているようです、不動産業者などにも協力を要請しています。都市化すればするほど、万一の事態に備え多くの方の結集が必要だと思ひます。

平成二十四年度年忌表

来年の年忌は次のとおりです。お早めにお申し込みください。

年忌	逝去年
一周忌	平成二十三年
三回忌	平成二十二年
七回忌	平成十八年
十三回忌	平成十二年
十七回忌	平成八年
二十回忌	平成二年
二十三年回忌	昭和六一年
三十三回忌	昭和五十五年
三十七回忌	昭和五十五年
四十三回忌	昭和五十五年
四十七回忌	昭和四十九年
五〇回忌	昭和三十八年

各個別の年忌はホームページでも見られます。ご利用ください。

行事予定

- 二月十一日 大般若会
正午から御詠歌奉詠
午後一時から法要です。皆さんのご繁栄を祈禱します。皆さ
- 二月十五日 涅槃会
十時から法要
- 四月八日 灌仏会
十時から法要
甘茶を戴いてください。
- 八月十八日 お施餓鬼
受付は七月一日からです。
棚経は八月十日くらいからです。
原則は今年と同じです。お盆前に各戸別のご案内をお送りします。

誰も責任を取らなくなった

住職 春日井浩道

今から三百年ほど前、薩摩藩に平田鞠負（ゆきえ）というご家老がいました。幕府が薩摩に命じた木曾三川の改修工事の責任者となり、工事資金の調達から、現場の指揮まで全てに采配を振るつたそうです。この工事が、木曾三川の土地とは全く関係もない薩摩に命じられたのは、薩摩が外様であったことに加えて、経済的にも有力であった為、その力を削ぐ目的でした。費用は全額薩摩の負担、土木工事の専門家は雇うな、という条件だったそうだから、まったくの嫌がらせとしか考えられない話です。こんなくらいなら幕府と一戦交えようという意見まであったそうだが、民に尽くすのも武士の本分だ」と言つて藩論をまとめたのも平田だったといひます。

一年半の難工事の完成後、平田は腹を切つて死にます。何十万両という膨大な出費と、何十人もの犠牲者を出したことの責任をとつたということです。

昔、そんな話を読んで子供心にも身震いするような感動を覚えた記憶があります。

最近、いろんな場面で、世の中の上に立つ人たちの無責任が目立ちます。どこかの米軍基地の問題

にしても、「政治生命をかける」とか、「最低でも県外」とか言つておきながら、政権についたとたん、方便だったとか言つてとぼけている人たちがいます。アメリカと面と向かつて渡り合うのが怖いのでしょうか。「民に尽くすのが政治家の本分」ではないのでしょうか。まったく、政権さえ取ればこつちのものだという態度では、国民の信頼を失うのは当然でしょう。

また、原子力の問題にしてもそうでしょう。安上がりだという理由で、極めて安易に原子力に乗り換えました。放射能が漏れ出す事故は、隕石にあたつて死ぬ確率よりも低いんだと言われてきました。それが震災でいとも簡単に壊れてしまいました。反対する人たちには、金をバラマいたり、脅しつけたりして推進してきたのに、こういう結果になると「想定外」だと言ひ訳されます。しかし想定が自分の都合のいいように甘く設定されただけのことです。そして、社長の首まで切つておきながら、一番の権力者はちゃんとしがみついています。

また、忘れてはならないのは先の戦争の責任ではないでしょうか。勿論国の防衛というのは、独立国家にとつて不可欠のことですから、軍の存在自体は当然のことでしょう。

う。だからといって、誰が考えても負けるに決まつている戦争を、する必要もない戦争を、始めてしまいました。軍人たちの頭の中には日露戦争の時のような、締めくくり方が想定されていたといひますが、これだつてよほど自分たちの都合のいい話ばかりをつなぎ合わせたストーリーなのでしょう。

それでも国を挙げての戦争が始められたのは、善良な国民が「おかみのすること」に間違いはないと肅々と従つたからでしょう。ほとんどの作戦は、現場経験のない秀才のエリートたちによつて立てられ、何も知らない兵隊たちは、お国のためになるのだらうと、死なされました。ほんの一部のエリート軍人が、自分の手柄のために、まさに将棋の捨て駒のように兵隊たちを投入しました。その挙句、全国で三百万人もの命が失われ、慈眼寺の境内にも、三十基程の戦死者のお墓が並んでいます。

会社の経営者ですら、じぶんの手柄のために失敗をすれば、犯罪者になるのです。今度のオリンピックの事例を見れば明らかです。ところが、先の戦争では、「一億玉砕」とか、「一億総懺悔」という言葉が持ち出されて、あたかも、戦争の責任は全国民が負うべきだといふような風潮になつてしまいました。

憲兵や警察を使つて反戦の声を封じ込め、国民には本当のことを知らせなかつたのに、責任だけは平等に負担させるとは、なんと浅ましいことでしょうか。靖国神社にA級戦犯が祀られるようになったら、昭和天皇は靖国神社への参拝を止められました。彼には本当の姿が見えていたのでしょうか。

三百年近く前のご家老様はちゃんと責任を取ることができました。ところが現代のエリートたちには組織を破滅に追い込むほどの失策をしても、なんだかんだと言ひ訳を持ち出し、その地位にしがみつこうとします。なんと道義心のなくなつてしまつたことでしょうか。封建時代に有つて、民主化された日本に無くなつてしまつたもの、それは「武士道」だったのでしょうか。そういえば、最後の武士だった乃木希典大將は戦争の責任をとつて明治天皇のあとを追つて割腹しました。では「武士道」とはなんだつたか。もしかして儒教の精神なのか。あるいは、四民平等で自由な個人主義というものが結果として、古いモラルを壊してしまつたのか。たとえば、最も自由主義的であつた豊臣秀吉のような人は、まさか切腹して責任を取るなんてことは、絶対にしないでしょうね。

梅花講たより

十月二十日に、旧名古屋市民会館というところで、尾張部の管内の発表会が有りました。多くの梅花講から、たくさんの方々が参加者があり、日頃の練習成果を披露していました。慈眼寺講からも、八人の方が参加され、とても上手に奉詠されていました。写真だけで、声をお聞かせできないのが残念です。



管内大会 平成23年10月20日

お仏膳の受付をしています

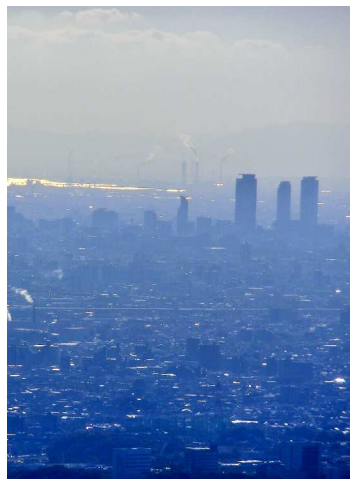
平成二十四年のお仏膳の受付をしています。一年分、一膳あたり千五百円です。

お供えのお菓子はお下がりとしてお持ち帰りください。

弥勒山に登る

誰かに誘われて弥勒山という山に登りました。春日井市で一番高い山で、標高約四百メートルです。細野町のグリーンピアという公園から登ります。麓から約一時間で頂上まで行けます。

平日に登ると、定年過ぎたシルバー世代がいっぱい登っています。話を聞いていると、年に百回以上も登る人が何人もいます。ヤマガラが餌付けされていて人の手からピーナツを食べています。天気がいいと、濃尾平野が一望でき、まるで織田信長になったような気分です。今年は五回登りました。写真は名古屋駅と伊勢湾。



自然エネルギーを考える

三月の福島事故以来、原子力発電所がたくさん止まってしまいました。電力会社によつては四割くらいを原子力で発電していたようです。夏や冬のピーク時には設備不足で大変なようです。

そこで、注目されているのが風力や太陽光などの自然エネルギーです。太陽光発電は、時々パネルを屋根に載せているお宅を見かけるようになりまし。一キロワットの価格が五十万円くらいまで下がってきたそうです。いくら補助金も出るようですが、それでも何百万円もかかります。五キロワットの設備でも二十万台くらい並べると、原発一基分くらいになります。やはりお天気次第というのが泣き所です。

また、各所で風力発電の風車が建てられています。この近くでは三重の青山高原に沢山の風車が並んでいます。直径と高さが五十メートルで、一基あたり七百五十キロワットだそう。これも千基並べると、中型の原発一つくらいにはなります。日本中の山という山にびっしりと並べると、どうにか原発分をまかなえるかもしれない。それでも、風まかせという点では極めて不安定なものでしょう。どうか、安定的に使えそうですね。

のは地熱発電だそうですが、これはどこでも出来るわけではないようです。

結局、原子力任せで、何でも電気に頼りすぎた生活様式を作ってしまったのが悪かったのだろうか。

来年も良い年になりますように

檀方総代	伊藤辰男
伊藤秀文	伊藤正廣
伊藤久幸	大野和義
大野悟	木村廣孝
春日井浩道	

編集後記

夏からいきなり冬になったような感じで、早くも十二月になってしまいました。つい最近お盆だったのが、もう正月の準備をしなればなりません。年をとると、一年が短いというのは、どうやら本当のようです。この分では一生も早いのかも。皆さん良いお年を。

「慈眼寺たより」 第十一号
平成二十三年十二月十日
ホームページ

<http://www.ma.ccnw.ne.jp/jigenji/>